

職を辞して、今……

神村ふじを

この7月で町の教育長を辞めた。2期6年の長旅であった。終わってみれば、長旅も長いと感じられないことが不思議である。

2015年の4月に、「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」という長つたらしい名前の法律が変わり、それまで教育委員会を代表する教育委員長と事務局を統括する教育長の二本柱であった教育委員会が、責任の所在が曖昧だとの理由で、教育長を教育委員長と一本化、教育委員会を統括代表するものを教育長とし、教育委員長は廃止になった。

旧法では、教育長は教育委員の互選によって決めることになっていたが、新法では、地方自治体の議会の同意を経た上で、首長が直接任命することになった。また、任期が4年から3年に変更された。

その新教育委員会制度の下、16年8月から22年7月まで、丸6年務めさせてもらったが、小学校に入学した子どもが中学校に進学することを思えば、やはり6年というのはとてつもなく長い。教育委員会の仕事としては、教育施策の充実を図ることや保護者の教育的負担の軽減をどう図っていくかなど毎日大きな課題に晒されているのだが、私にしてみれば、子どもたちがとにかく無事に過ごすことを願う毎日だった。

毎日全国のどこかで起きているいじめ、自殺等。自分勝手な言い回しになってしまうが、うちの町では決して起きないようにと、祈るような気持ちで日々過ごしてきたというのが正直なところである。

根っから子どもが好きだということや、教師上がりの教育長ということもあって、ときどき学校を訪問させてもらって、子どもたちと接することができるのを大変楽しみにしていた。それも役得と思って仕事をさせてもらっていたのである。

教育長の大きな仕事として教職員の人事管理がある。学校教育がうまくその機能を果たせるように、年齢、男女のバランス、教職員一人ひとりの持つ個性なども加味しながら、人事を行わなければならない。

当該校における在勤年数や教職員本人の希望や事情なども考慮しなければならぬし、他市町村との人事交流も焦点になってくる。

教職員は県費負担教職員と言って、任命権者（任免や人事の権限者）は県の教育委員会にあるの

で、市町村立の学校に勤めているからと言って、市町村の意向だけでは事は済まない。

「人事は仁事」とよく言われるが、100%みんなの思い通りに進むことなどまずない。で、年度末になると頭と肚が痛くなってくる。

多少愚痴めいたことを書いてしまい、今さらという感じもするが、教育長という仕事は体力よりも精神力が物を言うということを改めて知った6年間でもあった。

繰り返しになるが、無事に6年間過ごせたということが、何よりありがたいことを実感している。

議会対応というのなかなか骨が折れる代物だった。議会は年4回、これは定例会だけであつて、必要に応じて臨時議会が度々開かれる。

議会の度に一般質問があつて、これは議員さん方が町政全般にわたり、町の姿勢を正すものだ。もちろん、教育に関わる質問も出てくる。むしろ教育長に対して質問がない方が珍しく、必ずと言つていいほど教育関係の質問が出てきたものだ。

答弁は教育委員会としての公式な考えになるので、事前通告という形で議員さんから質問の内容が示されるのだが、かなりの神経を使って答弁をまとめなければならぬ。

例えば、児童生徒の減少に関わつて、将来の学校のあり方などを尋ねてくる場合などは、学校の設置者は市町村であるため、事前に首長との打ち合わせが必要であるし、予算が伴う場合などは、

事前に財政部局と擦り合わせをしておかなければならない。教育委員会は独自に自主財源を持つていないという事情がある。

議員さんによつては質問の内容が不明瞭なことがあつたり、議場で追加の質問が出たりするの  
で、ちぐはぐな答弁にならないように細心の注意を払う必要があつた。

また、質問というよりは要望という方が正しいような質問もあり、何せ議事録に一言一言載つて  
しまうのだから、言質という意味からも本当に議会答弁というのは気を使う大仕事であつた。

忘れられない質問があつた。それは、一般質問という形ではなく、国で進めようとしているICT  
T強化対策（児童生徒ひとり1台のタブレット端末等の整備や通信回線の強化、高速化）に関わる  
予算措置の審議の中で出てきた。

その内容は、「ICT（情報通信技術）教育が大事なのはわかるが、教育長はパソコンやスマホ  
を自由に使いこなす子どもと野山を自由に駆け回る子どもとどちらが大事だと思うか。どちらも大  
事だではなくて、どっちが大事か簡潔に述べてほしい」というものだった。

子どもたちを見てみると、ICTとかネット社会とかに翻弄されて、子どもたちの成長にとって  
大事な事柄が忘れられてしまつていような気がして、アナログ的な生き方をもっと見直すべきだ  
という思いが強くあり、野山を自由に駆け回るの方が大事だと言いかけそうになつたのだが  
……。

億単位の金を使って、来るべき社会に順応できるように、ICT環境を極力整備することが求められる状況にあつて、非常に厳しい質問であつたが、自然との関わりなどで培われる人間らしさ、人間としての強さ、あたたかさを礎として、その上で現代を生き抜くためにICTを活用する力が必要であるというような答弁をした記憶がある。

考えてみると、教育の本質を考える上で、大変大きな課題を突き付けられたという感じがする。もちろん答えなどないし、何十年、あるいは何百年先になつてもまだ答えは見つからないかもしれない。

教育長を辞めてから初めて子どもたちと接する機会があつた。ある小学校から歴史講話をお願いしたいという依頼が入つたのだつた。

この時期、ほとんどの学校で6年生の修学旅行を実施している。私の周辺の学校は隣県に出かけることが多く、会津若松、日光辺りが人気である。

ここ2年、コロナの影響で実施を取り止めた学校や小規模の県内旅行に変更するなど、大変な状況が続いていた。

何と言つても小学校6年間の最大のイベントであり、子どもたちも本当に楽しみにしている修学旅行。何とかできないものかと各学校で腐心しながら、コロナの状況とにらめっこしていたのである。

依頼を受けた学校では、十分な感染予防対策を取れば実施できると判断し、会津若松方面への旅行を決めたとのことだつた。

そこで、幕末から明治維新にかけての戊辰戦争で、会津藩、桑名藩、庄内藩が薩長主力の官軍と戦つたことなどを話してみようと思つたところである。

玄関先から廊下、職員室、校長室と進み、6年教室に入ると、見たことのない人が入ってきたとちよつと好奇な目で見る子どもたちがいた。

今日来た理由を話しながら自己紹介。「面白くなかつたら『おもしろくなえ』て言つていいがらな」などと冗談を言いながら、何とか使えるようになったPower Pointを活用しての授業となつた。子どもたちの目はすごい。さらさら輝いている。本当に真剣に食い入るように画面を見つめ、話を聴いてくれた。

学校っていいなあ、子どもたちの声っていいなあ、今日は子どもたちから元気をもらったなあ、そんな気分になりながら、学校をあとにした。

あ そうかそういうことか 鱗雲 多田道太郎